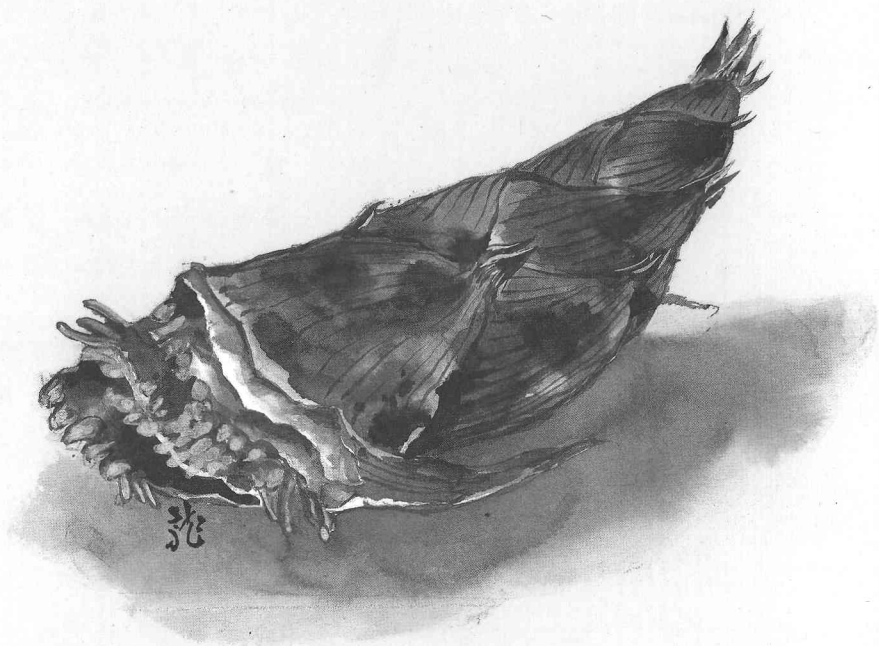


季刊 連句 第10号

昭和六十年九月一日発行



季刊連句 第10号 目次

二十韻の愛称 (南柏雜記 8).....					1
連句の読み方・味わい方 (二).....	東	明	雅		2
—「木のもとに」の巻—					
牛耳傳 (3).....	杉	内	徒	司	6
二十韻 巴里祭 .....	東	明	雅	捌	8
絶頂の城 付勝練習歌仙 .....					14
二十韻 梅雨の富士 .....	東	明	雅	捌	16
沙羅の会 三歌仙 .....	氏	原	正	雄	18
連句のなかの季語—連句雜感 (二).....	草	間	時	彦	20
深川遺跡めぐり .....	中	島	啓	世	23
第十四回猫蓑会 六歌仙					
まぶしき昼.....中川 哲.....	25	緑	蔭.....	原田 千町.....	25
夏めきし風.....富田一青子.....	26	梅	雨 明 け.....	上月 淳子.....	26
亀 の 子.....花井喜久子.....	27	夏	蝶.....	速水 昌子.....	27
質疑応答.....	28	連句会案内.....			29
			雁帛往来.....		29

表 紙 ( 笥 ) 宮 崎 龍 火 子

## 二十韻の愛称

### 南 柏 雜 記 8

「季刊連句」八号で、新連句「二十韻」の提唱をして、序にその愛称を公募したところ四人の方から合計十五の御提案があった。九号の「雁帛往来」にその詳細が報告されている通りである。四人の方々の御厚志に対し、深く感謝する次第である。

この十五の愛称はすべて心の籠ったすばらしいものであるだけにその中から一つを選ぶことはなかなか困難であるが、二十韻という形式がこれから現代人に愛用される為には、愛称についても多くの人の心からなる賛同が必要である。主宰が勝手に選んでも、多くの方々に愛用されなければ意味はない。それについて、私見をすこし述べさせていただきます。決定的際、あるいは投票の際の参考にしていただきたいと思う。

それにしても樗晴さんの御熱心さには、ほとほと感心してしまった。一人で九つもお考え下さったとは感激の至り

である。しかも、星火とか、冬扇、はたち、山椒、遊、丸子（東海道二十番目の宿名）など、いずれもおもしろいと思う。ただ、ネクター、オード、コントなど外来詞はいかがであろうか。尤もソネットなどという詞もあるけれども。

慶二さんからは Nekomino・Tukushi・Kashiwa・Koki の四つが提唱され、漢字はおまかせするとのことであった。もちろんローマ字ではまずいだろうが、漢字でなくとも平仮名でもおもしろいではなからうか。

正江さんの小面は、能楽界で有名な雪の小面、月の小面、花の小面から来た実に優雅な名で、最初は私も飛びついたので、二十句の中に必ず雪を入れることが出来るかどうか。雪が入った二十韻を小面と言うならそれはそれで結構で、すばらしいと思う。

連句界最長老の京極先生からいただいた柏手という名も理に叶っている上に、おめでたくよい名と思う。

最後に「おくればせながら二十韻 愛称 一案『雅』<sup>みやび</sup>（明雅先生の一字をいただき）」というお葉書を、A・C・C 最新参と名乗る依田和さんからいただいた。これも含め、右の私見も参照されて、よい愛称が決まることを切望する。

# 連句の読み方・味わい方 (二)

東 明雅

——「木のもとに」の巻——

旅人の虱かき行く春暮れて

曲水

はきも習はぬ太刀の鞆ひきまだ

翁

(現代語訳) 暮春のころ、旅人が虱のあとを搔きながら旅をしているが、その佩きなれぬ刀の鞆ひきまだも何か不格好で、間が抜けている。

(付心) 会釈の付け。前句をその旅人の持物であしらっている。

(付味) 前句の虱を搔きながら旅をする何かけだるい感じと、佩きなれぬ刀につけた鞆ひきまだのぶざまな感じが移っている。あるいは、虱の褻ひきの感じにも共通するものがあるのではなからうか。

(転じ) 打越はうらかな気分を十二分に表現した叙景の句で、気持のよい句であったが、この句は一転して前句の旅人の鬱陶しい状態と気分をあらわし、打越が花見の会、この句は孤独の旅人、この点にも十分な転じが見られる。

(補説) 鞆ひきまだは褻肌ひきまだの意で、ひきかえるの肌のように疣のある皮を言い、またその皮で作った刀の鞆袋を言うことは、「今時旅行する者、刀・脇差にひきはだの革にて尻鞆を作りてさやにかくるをひきはだと云ふは、ひきはだの尻鞆と

いふを略していふ詞なり」と「貞丈雜記卷十四」に記された通りである。太刀とは腰に吊り下げる太刀で、腰に挿す刀や町人の道中差しの脇差とは違う。だから、この句を文字通りで解すれば、中世以前の武士の旅姿と解すべきだろうが、「日本永代蔵」巻一の五にあるように、町人が道中差しに皺皮ひきまだを付けている例があるし、前句の位から見てもこれは近世町人の旅姿と見た方が妥当であり、その姿を「わざと事々しく、時代がかつて『はきも習はぬ太刀の』と言ったところが俳諧のおかしみなんです」という暉峻説(同氏・芭蕉の俳諧下)に賛成である。

はきも習はぬ太刀の鞆

月待て仮の内裏の司召

翁 碩

(現代語訳) 月明のころを待って、仮の内裏では司召が行なわれたが、官人のはきなれぬ太刀の鞆も物々しい。

(付心) 有心の付。前句に、太刀とあるから内裏を、はきもならばぬというに仮のと応じたもの。猿島内裏の面影付というが、それには限定されないだろう。但し、須磨や吉野の行宮などの面影は否定できない。月の定座である。

(付味) 前句の「はきも習はぬ」の何か借物めいた感じが、「仮の内裏」の語に響いている。

(転じ) 発句以来の駘蕩たる気分が一転して、急に緊迫した気分になって来た。

(補説) 初五の「月待て」は「月待ちて」と読むか、「月待たで」と読むか諸説の分かれるところである。非常の際だから、月を待たずにと解する方がより緊迫感があつてよいという説も一理あるけれども、考えてみればここははまだ表六句のうちであるから、それほど緊迫感は不要であり、且つ、「月待たで」と言えは、折角の表の月が無月の状態となるのも気にかかる。司召と月の関係については山田孝雄博士の説(「続芭蕉俳諧研究」)もあるもので、ここでは「月待ちて」の意に取ることにした。

月待て仮の内裏の司召

碩

靱臼つくる袖かはやわざ

水

(現代語訳) 月の頃を待つて仮の内裏では司召が行なわれ、その内裏に仕える袖人たちが靱臼を作るその早さよ。

(付心) 前句が仮の内裏の司召で、貴族階級のあわただしさを描いているのに対して、付句は内裏に奉仕する袖人の甲斐甲斐しさを描いている。これは七名のうち向付と言われる手法である。また吉野朝行宮などの面影付でもある。

(付味) 「仮ノ字ニ早業ハヒビキナリ」と「秘註俳諧七部集」に言う通り、前句の仮の内裏の何か事の欠けた倉卒さに対して、袖の早業がよく響き合っている。

(転じ) 打越と前句が、ともかくも貴族の世界を描いているのに対して、この句からは袖人という庶民階級の生活を出し、情景、気分、ともに一転している。

(補説) 靱臼は稲の靱を摺って殻を取り去る臼で木で造つたものと、竹を編んで泥を充てて作る土臼とがある。露伴の評釈以来土臼説がもっぱら用いられているが、ここでは袖が作るものであるから、もちろん木臼である。木臼の作り方については清水瓢左氏の解説がある。(はいかい練習第十五号)

以上で表六句が終つた。発句・脇の長閑な景から、第三に風を掻きながら行く旅人に暮春の情を重ね、四句目はその旅人の会釈と穏かに進んで来たが、第五句目に仮の内裏と一転して変化を見せ、折端にはその内裏に仕える庶民の姿を出し、まずは序として上々の表ぶりである。

靱臼つくる袖かはやわざ

水

鞍置る三歳駒に秋の来て

翁

(現代語訳) 袖山で袖人は大急ぎで靱臼作りに専念し、それを運ぶ鞍を置いた三歳駒は秋を迎えて一層勢いづいている。

(付心) 七名で言う会釈の付けであり、八体で言う時候の付けである。

(付味) 前句の勇み立った袖人の振舞を、三歳駒(生後三年の若い駒、漸く一人前になった盛りの馬)が、高天肥馬の候を迎え颯爽たる姿に移した。響きの付けである。

(転じ) 打越の仮の内裏の世界から完全に転じて、庶民の生活の一端を示している。

(補説) 「鞍置ける馬といへば、農馬駄馬牧の馬にはあらずして、然るべき士の乗用の馬と聞ゆ」という露伴の意

見もあるが、これが乗用の馬ならば、打越の仮内裏の気分に通い、返ることになる。また、前句との位から見ても、ここはどうしても庶民の馬、前句との関係は、あながち糶臼と鞍とを結びつけて考えなくとも、忙しく働く袖のそばに、鞍をつけた若駒が嘶いている景を想像すればそれでよいが、荷物を運ぶ鞍である以上、糶臼を運ぶものと考えても決して悪くはない。

鞍置る三歳駒に秋の来て 翁 碩

名はさま／＼に降替る雨

(現代語訳) 一口に雨と言っても、時により、降り方によりいろいろ名が変わるが、その秋雨に濡れている三歳駒の姿はいじらしいことだ。

(付心) 天相の付けであり、遁句と言ってよいだろう。

(付味) 前句の「秋の来て」を受けて、「光陰のはやきを云へる」(魚潜「付合考」)一種の観想的気分が通いあっている。

(転じ) 打越に付けた三歳駒は元氣潑刺たる若駒であったが、この句になると秋の雨にうたれた哀れな姿が目に見える。気分が賑かで陽気なものから観想的なものに変わった。

(補説) 「鞍置ける三歳駒を、宿駅などの馬次場の様と見て、その荷鞍に初秋の小雨のふりかゝる景色を探って来たのである。中略。その雨の哀れに濡れて、この駒も駅場駅場の年月を老い行くのであらうと、幼い駒に寄せて、移りかかはる世の苦勞の姿を見せたのである。」(太田水穂「芭蕉連句の根本解説」という鑑賞も肯綮にあたる。そうなれ

ば、「降替る雨」は秋の雨のみでなく、一年中、春雨・五月雨・夕立・時雨などを含めた雨のそれぞれの趣を言っていると解した方がよいであらう。

名はさま／＼に降替る雨

入込に諏訪の涌湯の夕暮暮

水

(現代語訳) さまさまに降り替る雨の中、大勢の混浴によって、諏訪の温泉の夕暮時は雑沓している。

(付心) 起情の句。時分の付けでもある。

(付味) 「雨の降かはりたるは夕暮と定め、さま／＼といふに入込とはひびきなり」と晝台「秘註七部集」がいう通り、前句の「さま／＼」に入込の人をもつて応じ、前句の観想の余情を受けて、田舎の温泉の賑やかなうちにも一種の佻しい風情を出している。

(補説) 入込は、浴場に男女貴賤の別なく入り混浴するをいう。諏訪は中仙道の一宿で、山中の鄙びた温泉、前句の雨のわびしき情に対して、それに適した場所と時刻を定めた付けである。

入込に諏訪の涌湯の夕暮暮

中にもせいの高き山伏

水

(現代語訳) 諏訪の温泉の夕暮れ、男女入り乱れている中で、背の高い山伏の姿が一際目についたことであった。

(付心) 其人の付けで入込の中の一人を描いた。

(付味) 諏訪は山国であり、また軍神である諏訪明神の鎮座している所でもあるから、山伏の語が利いている。

(転じ) 打越が人情なし、場の句であり観想がかつたさ

びしい句であつたのに対して、これははっきり人情他の句であり、勢がよく、気味悪さとユーモアが感じられる。

(補説) 土芳の「三冊子」にこの句を評して「前句にはまりて付たる句也。其中の事を目に立ていひたる句也」とある。そのことは、「中にも」という語が、全く前句によりかかつていて、独立性に欠けるのを指摘したものである。しかし、「此巻の秀逸なるよし、世々の模範として称美する付句也。能く味わふべし」(錦江「七部通旨」)などのように、古来、高い評価を得ていることも事実である。

それは前句に対する付味のよさとともに、「統芭蕉俳諧研究」にも述べられている通り「せいの高き」という単純な特性をとらえて山伏を活写するとともに、周囲の多くの人間の姿も併せて想像させるところにあり、また、この句がきっぱりとした歯切れのよい表現を取っている点である。「やや平板になつて来たところを俄然、奇峰の聳えるような句をあしらっているところもつとも注意される」(太田水穂「芭蕉連句の根本解説」)の説も首肯される。

中にもせいの高き山伏 翁

いふ事を唯一方え落しけり

碩

(現代語訳) 山伏たちの寄合の席で、中でも背の高い一人の山伏があくまで自分の議論を押し通してしまふ。

(付心) 其人の付け、前句の山伏の性格、行動を描いた他の会釈の付けでもある。

(付味) 「セイノ高キト言ニ、唯一方トハヒビキナリ」(暁台「秘註」)とあるように、一方(いっぽう)という漢

語には勢いがあり、前句と響き合っている。また、前句の山伏のいかにも強情一徹らしい余情を汲んで、それを十分表現し得ている。山伏は強情で頑固なものと同場がまきまっていたので、この句は一座の笑いを誘ったことであろう。

いふ事を唯一方え落しけり 碩

ほそき筋より恋つものりつつ 水

(現代語訳) ふとしたかりそめの事から恋心がますます募って、すべての話をその方へ持って行くようになった。

(付心) 前句の人の言動の理由を述べている形であるから、其人の付。これは会釈ではなく有心の付けである。一句としては形の上からは自の句であろうが、前句と結んでは女性の一般的傾向を述べたような形であり、それを心配し、意見する人の存在も言外に感じられる。

(付味) 打越と付いた前句は山伏であるが、その前句にこの付句をすると一転して前句も女性となる。これは「取りなし付」(見立て替え)の方法で、「是らは『にほひ』の滋味をいたくそなふ悪手段である」(樋口功「芭蕉講座」)という意見もあるが、これは芭蕉の作品一巻全部を『にほひ』で割り切ろうとする偏見である。むしろ太田水穂氏が「芭蕉連句の根本解説」に説かれた「手づよい陰婁な句境が皮一重を隔て、かういふ色っぽい境に接触して味はれるのは、一つの嶮しきで無ければならない。芭蕉の俳諧にはこのきどい裏合せの句がしばしばあり、この着かず離れずの危ふい機会―或は呼吸というやうなものは芭蕉俳諧の独特の味である」という意見に賛意を表する。

# 牛耳傳 (3)

杉内徒司

## 五

連句は三句の亘りを考慮しつつ、前句を支点として付句を案ずる。付句によって思いがけない方向へ展開してゆくのが連句の楽しみの一つだが、牛耳はある腹案をもって連衆をその方向へリードしてゆく。その流れが意図する線から逸れると、素早く力強い句を付けて強引に腹案に引き戻す。

牛耳は小説に必要な構成力を連句に取り入れられた。意図的なものを連句に持ち込んだのは牛耳が初めてであり、それが破綻を示さず成功したのは、根津芦丈から学んだ伝統的な俳諧知識をこなしていたからだろう。

昨今詩人、作家間にも連句実作に手を染める者がふえ、その作品がジャーナリズムにのっている。それらの人々が感性だけを頼りに付けるのとは違って牛耳連句は蕉風であってあぶなげがなかった。

牛耳のこの試みがどのグループでも受け入れられていたわけではない。当時は実作者の数が少なかったし、古い考えの人が多かったから、牛耳の試みが実現した方が少な

った。却って遠方の新しさのわかる連衆に支持された。根津芦丈に育成された信大連句会は芦丈の没後（昭和四十三年二月）やや停滞気味の時代があった。

芦丈三回忌追善のため編まれた「苧日記」（昭和四十五年九月刊）の上梓を機に、信大連句会衆は牛耳と初めて顔を合わせ、牛耳の真価はたちまち評価されたのである。

信大連句会の主要作品集を繙くと牛耳の影響を如何に強く享けたかがよくわかる。

即ち、信大連句会の次の三書にはどれも牛耳歌仙と牛耳讚美の文章がのせられている。

東 明雅 『夏の日』（昭和47・9刊）

高橋玄一郎 『落落鈔』（昭和51・10刊）

小出きよみ 『花野』（昭和53・12刊）

## 六

牛耳は晩年に牛耳プランを試みて成功したよき弟子どもとめぐり合った。まったくの初心者グループに八ヶ月間続けて牛耳調の第三を出されて指導をされた。

幸福にも牛耳師の補佐役として手伝わせて頂いた私は、



『摩天楼』に収録されているそれらの「第三」を読み返すと、その席上でおぼえた興奮が再び甦ってくるのを感じる。それらの「第三」とは次のような句だ。

日ざしよし (昭和46・11・7)

月今宵客鮫鱓をもたらして

比庵の書 (同 12・5)

民芸の草染め紬機上げて

新春和楽 (同 47・1・9)

凍陽を辛夷の苔ちりばめて

梅探る (同 2・5)

ジエツト機の席あたたかく出迎へて

班雪 (同 3・5)

雛納め祖父にこやかに手を貸して

夜の桜 (同 4・9)

弥生尽無為を愉しみ机に倚りて

母の日 (同 5・14)

風薫る黄金と緑に詩ありて

梅雨前線 (同 6・11)

星涼しテラスに客を誘ひて

構成力を示す付句は略すが、万事こんな調子だったから、この初心者グループの作品は忽ち牛耳調に仕上がってゆき、連句のとりこになってしまった。

牛耳の没後、この連衆の一人「わだとしお」は、俳諧雑

誌『杏花村』を五十二年一月から刊行した。『杏花村』は六十年四月、百号を以て終刊したが、月刊連句雑誌としては戦後唯一のものであり、今後も当分あらわれる見込みがない事を思えば、その起爆剤となった牛耳連句の凄さの一端がわかるであろう。

## 七

牛耳は芭蕉のよみ方にも作家的な目をもっていた。

西鶴が住吉神社の矢数興行で二万三千五百句に華々しい成功を収め、其角が立会役になっていたニュースを野ざらし紀行中に耳にした芭蕉は、母の死にも会い、また一の弟子其角にも裏切られたと思ひ、切破つまった気持で名古屋衆と巻いたからこそ「冬の日」五歌仙が新境地を展いたのだと、牛耳は蕉風開眼の時代的背景を説く。

芭蕉学者によれば、こういう説はないそうだが、その大矢数が貞享元年六月五日の興行、「野ざらしを心に」深川を出発したのが貞享元年八月であり、「冬の日」が同じ年の十月から十一月までの名古屋滞在期間の俳諧であることを考え合わせると興味ある見方ではあり、いつかは学界の定説になるかも知れないよ、とある浅酌の宵に打興じられていたのも懐しく思い出される。

## 二十韻

巴里祭

東 明雅 捌

長雨の朝よりあがり巴里祭

赤白青と縞の日覆

うなる髪童よちよちあゆみ出て

しゃべりながらに眠気催す

欄干の龍舞ひ登る月の天

秋惜しむ身を訪ふ人もなし

この里は婆芸者と稔り田と

一見チベツト風の横顔

新発意ら文句あつたら言ってみろ

まとはりつきし子豚親豚

裕子

恒

時

江

鱒

子

恒彦

時彦

正江

鱒

### 表(四句)

明雅 発句をどうぞお出し下さい。時彦先生には脇をつけて頂きますので皆さんどうぞ。

長雨の朝よりあがりパリー祭

梧桐に忽とわきたる梅雨の蝶

今朝の空はつきり梅雨の明けにける

江戸切子盃に充たすや巴里祭

明雅 ご主人が選んで下さい。

時彦 それでは「長雨の」をいただきます。

長雨の朝よりあがり巴里祭

恒彦

明雅 そういえば今日は巴里祭でした。やられたところどころです。パリー祭は漢字のほうがよろしいですね。

時彦 次も夏、三夏。亭主として付けさせていただきます。これでいかがでしょう。

赤白青と縞の日覆

時彦

明雅 トリコロールですな。夏三句はちょっとくどいので、次は雑でお願いします。止めはなるべく、て、にて、らん止めどうぞ。そして人情を入れて下さい。

恒彦 この機会に、正調二十韻を教わりたく思います。前の二句は人情なしでしたね。

うなる髪童よちよちあゆみ出て

ハイヒール脱いで乗りこむ渡し船

フライドポテト袋ほかほか

門限と関係なしに身をゆだね

軍手のままで撫でてやる臂

貫之の千鳥月夜と申すべく

八十路の姫炬燵うたた寝

箔入りの箔がゆらりと酒瓶に

笑ひ初めたる三輪の神山

夢の中無銭旅行で浴びる花

耳に響くは春蟬の唄

昭和六十年七月十四日首尾

於 俳句文学館

連衆 星野恒彦(貂)

草間時彦(庵主)

秋元正江(猫蓑)

本井 鱒(ザホトトギス)

永方裕子(万蓑)

恒子 鱒 江 明子 江 同 時 鱒 江 恒子

バリカンの音が折々こぼれきて  
その中の格天井をたしかめて

明雅 三つ頂きましたがるなる髪が転じがきいているので頂きます。この言葉は万葉にあります。

うなる髪童よちよちあゆみ出て

正江

恒彦 どんな髪型ですか。

正江 あのう、聖徳太子の幼い頃のような髪です。

明雅 一巡したいので裕子さん、鱒さんどうぞ。

眠気催す句玉の音

猫にもありし武者ぶるひ  
いつまで仰ぐ水煙の上

明雅 水煙はお寺ですからいけません。句玉は高尚すぎますし、猫は人情がありません。

鱒 水煙で釈教になるとは厳しいですね。

裕子 病気も駄目ですね。

時彦 病体、旅体は避けるといえますね。

明雅 いや、旅体はいいのです。芭蕉にもありますよ。

「旅人の風かき行く春くれて」(「木の下に」の巻の第三)  
鱒 もっと俗な音、ソロバンとか思いましたが、日覆で  
商店のイメージに重なるのでこれではいかがでしょう。

しゃべりながらに眠気催す

鱒

裏(六句)

明雅 裕子さん月をどうぞ。動物と結びつけても、恋の情でも。植物もまだ出ていません。

裕子 一番苦手です。これはいかがでしょう。上の五文字が出ませんが、何とか塔の龍舞ひ上る月の天。  
鱒 日本橋の飾りにあるブロンズのようなのですか。

欄干の龍舞い登る月の天

裕子

一同 妻い月がでたなあ。

明雅 前が眠かったからいいでしょう。次は人情を入れ下さい。でないと「しま」になります。

恒彦 「しま」とはなんですか。

明雅 1・2が場。3・4が人情有り、5・6が場では完全に稿模様になります。

恒彦・鱒 なるほど稿ですね。

明雅 さあ一巡が済みましたから、出勝ちです。すっと出ないと、去来抄の「夜すがらいとどみたまひ」みたいに「いとどみたまう」よ。

秋惜む身を訪ふ人もなし

恒彦

時彦 ぐっと古風に持ってきましたね。恋にしますか？

早苗 饗の果てたるあとのたかぶりに

菊枕縫ひあげつゝの恋心

菊枕恋の枕として縫ひぬ

虫取りにデートの人夢中なり

この里は婆芸者と稔り田と

明雅 皆さん少し上品すぎますので、婆芸者を頂きます。

時彦 「私たちのことをいっている」といわれやしないかとビクビクしています。(笑)

この里は婆芸者と稔り田と

一見チベット風の横顔

時彦  
正江

正江 先生のごひいきをこんな顔にいたしました。(笑)

明雅 もう一句人情を続けたいのです。うなみ髪からちよっと古くなりましたので、新しいのをつけて下さい。

二つあり顔のまんなか鼻の穴

印鑑をやすやす押して墓を買ふ

世界から選ばれ集ふカメラマン

実権は権僧正が握りゐて

汗血馬まがひの木馬またがらむ

明雅 実権、カメラマンは他で打越し。印鑑は重すぎるし、二つあり、は婆芸者で笑ったので困ります。

時彦 歌仙は一句三分とかいってせかされますが、二十

韻のときは充分時間がありますから、捌きは駄目ならビツと破く位なさってもいいではありませんか。

明雅 やり直しです。(約七分経過) さあ楽しみです。

けちったる自動写しの写真なり

チューハイはホテルのメニューにはあらず

ぬくから膝のたるみしも引は

くちずさむオントドマリギャキティソハカ

病む夫の重たくなりし病衣更ふ

癩持ちちに秘棄媚棄の効めあり

ネクタイにラーメンのしみつけにけり

新発意ら文句あつたら言ってみろ

明雅 こんどはパスしそうですよ。

新発意ら文句あつたら言ってみろ 鱈

時彦 いいやり句だ。こんなしゃべり言葉を使ったものが一つ位あつてもいいですね。

鱈 捌きから句をつつかえされた氣持がワツと出て、すつとしました。

明雅 永平寺の問答、庭詰、且過詰が浮かびます。いいですね。冬は名残の裏で冬の月を出そうと思ひますので、折端は雑でいって下さい。こういうのが出ました。

まとはりつきし子猿親猿  
ですが、猿よりほかの動物がいいでしょう。

裕子 では、ちょっと豚などでは。  
明雅 面白い面白い。こっけいなのが出てよかつた。

まとはりつきし子豚親豚 裕子

名残りの表(六句)

明雅 丁度半分です。折立ては雑でも冬でもけつこうですし、酒、海、鳥、時局なんでもいいですよ。

ハイヒール脱いで乗りこむ渡し船

病みつつも越山翁は不滅にて

なにやかとてんぶら種を揃へつつ

試験管並びし窓のうすぼこり

明雅 ハイヒールをいただきます。

ハイヒール脱いで乗りこむ渡し船 恒彦

恒彦 水辺がないというので出しました。

時彦 これは新しく面白。けれど恋になりませんか。

明雅 受け方によりましょう。次は雑か冬です。

今川焼のぬき懐

取りまわしたる鯉の甘露煮

都鳥どれ木母寺はどこ

餅霜焼とあはれなりけり

年寄り死んで空家のこれり

明雅 年寄りの句は厳しいですね。今川焼はちょっと古いので、ほかほかするものを考えて下さいよ。

フライドポテト袋ほかほか 裕子

明雅 新じゃがは夏、じゃがいもは秋ですが、フライシ

たのは無季にとりましょう。やっと新らしくなりました。  
恒彦 捌きは大きな船を動かすようで、舵をとるのが大変なのですね。

時彦 50万トン級の船の方向を転じるようなものですね  
鱒 次は恋でしょうか。前の恋は婆芸者でしたので慾求不満が残ります。ちゃんとした恋をしたいですね。(笑)  
花嫁が下着洗って騒がる

見事なる腎ぞと敬意表しけり

門限を過ぎてしまへば身もゆだね

牡丹雪玻璃のくちづけ真似てみん

水飲んでばかり幾夜を過したる

明雅 これは面白い。門限をいただきますが、これは大  
人の発想で、若い人は門限にこだわりますか。

鱒 僕は純情ですから門限にこだわります。(笑)しか  
し、若い子はこんなふうかも知れませんね。

門限と関係なしに身をゆだね

鱒

明雅 これで新しい恋が出て満足しました。

軍手のままで撫でてやる腎

時彦

鱒 これでは隔靴搔痒じゃないですか。(笑)

明雅 田園風景のようになりましたが、大人の恋になっ

ていいじゃありませんか。次は冬の月です。

時彦 人名がまだですね。無理に出す必要もありません  
か？鳥もまだですね。

明雅 今まで少し俗におとしましたので、皆さん責任と  
って、たけ高くして下さい。

貫之の千鳥月夜と申すべく

時彦

時彦 どうです。上品でしょう。

明雅 腎から千鳥とは。(笑)「思ひかね妹がり行けば冬  
の夜の川風寒み千鳥鳴くなり」(古今集)ですね。

恒彦 守備範囲がひろいですねえ。

明雅 次は少し述べたい句でもよろしいですよ。  
八十路の炬燵うたた寝

しらじら立つる冬の波の秀

北風吹く島にかかる大橋

和布刈神事をひかへたる磯

明雅 八十路の炬燵をいただきます。

八十路の炬燵うたた寝

正江

明雅 これで述べ懐が出ましたから、無常はいいでしょう。  
名残りの裏へ入ります。もう少しですから皆さんがんばっ  
て下さい。

名残りの裏(四句)

箔入りの箔がゆらりと酒瓶に

身内より近き隣人頼みにて  
神主が世間話をひとくさり

濡つくし再放送の昼の刻

明雅 ちょうどまだ酒が出ていませんでしたので、うまいところをねらいましたね。お酒をいただきます。

箔入りの箔がゆらりと酒瓶に

正江

鱒 次は春ですか？

時彦 花前ですから、早春でしょうね。

メーデー帰りどっと連れくる

どの横町も午祭にて

焼野こえ来したかぶり覚ゆ

霞み初めたる三輪の神山

明雅 皆、神様できましたね。霞み初めたるを頂こうと思

いますが、この巻はどうも上品過ぎますからね。

裕子 連歌みたいになってしまいますね。

鱒 酒で三輪をつけたのですが。

明雅 「笑ひ初めたる」

時彦 俳諧になった。いいですね。

笑ひ初めたる三輪の神山

鱒

恒彦 捌きの方は何処で参加なさるのでですか。

明雅 たいいてい匂いの花を頂きます。発句と匂いの花の

ときもあります。そこで参加するわけです。挙句は裕子さんがんばって下さい。さて、前が上品すぎますし、旅が出ていませんでこれを。

夢の中無銭旅行で浴びる花

明雅

恒彦 特に挙句の特徴はなんですか？

明雅 何でもいいのです。前句についてなくてもいいんです。発句と気分がつかないこと。同字を使わないこと、などでしょうか。(質疑応答欄参照)

耳に響くは春蟬の唄

裕子

明雅 これでうまくおさまりました。名残りの表から裏にかけては、特に面白いですね。

恒彦 歌仙と余り変わりませんね。

時彦 今日はずっくりとしたからそうかもしれない。

早くやればまた感じが変ります。

明雅 今日、一句ごとに全員揃うまで待ちましたから、一時半から五時半頃迄、約四時間かけました。

これは、巴里祭の巻となります。いい句をありがとうございました。

一同 ありがとうございます。

(文責 式田和子)

# 絶頂の城

付勝練習歌仙

東 明 雅

投句締切  
10月20日

通草の実供へてありぬ岐神

嘘のキッスが本物となり

親が居て子が居て電話ままならず

十句目

治定 ぱりぱりと炒るちぎり菟蓐

1 泥棒猫はすきを覗ふ

2 日の丸の出でテレビ終りぬ

3 鳴戸の渦も橋の上から

4 破産宣告出ない給料

5 小雨ごときに傘借りて来る

6 保守革新と金色の票

7 喪服の似合ふ白き首筋

8 玻璃戸の外に非常階段

9 夫にないしょの株価暴落

10 やっとお尻を上げる家猫

11 貧之ゆすり身に付きし癖

12 梯子はづしてこもる屋根裏

13 ほこりかぶった短波受信機

14 髭抜かれたる木屋町の猫

15 手帖なくせし不覚なりけり

貞子 昌子 妙子

千町 一青子

啓世 東夷 妙子

和子 昌子 妙子

美子 貞子 麻子

正哲 正江

淳子

16 地図で辿りしロッキーの旅

17 閨秀作家頭痛肩凝

18 火山灰降りつもる家の中まで

19 戻らぬかねに居ても立っても

20 柱時計の音のせはしき

21 懇懃無礼な利子の催促

22 床の間埋めしビデオパソコン

23 顔を窺ひ庇借る猫

24 通りすがりに猫蹴って行く

25 債務者の身の日々に細りて

26 卵をゆでる砂時計立て

打越、前句ともに自他半の恋句である。恋は二句から五句までは続けることができるのだが、まだ裏に入ったばかりの場所だから、恋句はこの位で止めようと考えた方が多かったようだ。私もそれに賛成である。さて、恋句から脱する句はいわゆる「恋離れ」であるが、これには心得がある。「恋離れ」の句は一句としては恋の意はないのだが、前句の恋句とは余情で微妙についていなければならぬ。だから、全く余情の感じられない無関係な句などを急に持って来るのはどうもよろしくないのである。

その点、治定の句は、恋人に電話しようとしても妨害があつて自由にならない気持を、自棄気味の調子に載せたおもしろい付けで、その炒られたものが「ちぎり菟蓐」という庶民の食べ物である点も俳味がある。さらに言えば、裏移りが外の風景で、打越は内外不明、前句はどうも家の内

みづゑ

杉亭

孝子

隆秀

篤子

彬風

由美子

智子

蓼艸

正雄

瑞枝



らしいから、これをまた外に飛び出すのはいかがか。その点もこの作者は心得て厨房における人の姿を描いたのは法に叶っているし、打越とちがい激しい調子で転じ十分である。

1の泥棒猫は俳味は十分だが、「すきを覗ふ」は「すきを窺ふ」と書くべきだろう。前句にすこし言葉の上で付きすぎである。2はよく読めば哀れがあり「日の丸」など意外性があるよい付けである。3家庭葛藤を鳴門の渦潮に比したのはおもしろいが、外の景になったのが惜しい。4は前句を見立替えしている。悪くはないがこれでは前句の余情が生きない。5は句意やや不明、しかも外に出ている。

6これも4と同じ。7ははっきり恋を続けている。艶な姿には魅かれないでもないが、こんな風に続けたらきりがない。8はおもしろい場面と気分のある句だが、やはり外が気になった。9も時局性を含んだおもしろい句だが、この句をつけると前句の恋の味が全く失なわれるのが残念である。10ここにも猫が登場、1の泥棒猫にはじまり、この句の家猫、そして14の木屋町の猫、23の庇を借る猫と24の蹴られ猫と五つも猫の句が出て来たのは、おもしろいとものに、何か人間の猫に対する深層心理の一端を示しているものではなからうか。この句の場合の猫は何かを寓しているのか。お聞きしたいものである。11は打越の気分・表現から転じが十分でない。12は前句の続きを言っている感じがする。電話がままにならぬのでやけになって屋根裏に立てこもる。それではあまりに真正直すぎる。「前句と付句の

付味は蓮の糸のように」という古人の言葉が味わって下さしい。13は捻った句である。12とは反対に付心が遠すぎて付味がよくない。14の猫は京都木屋町の由緒ある猫。若い女性に電話もかけられぬもどかしさのはらいせに、罪もない猫の髭を抜いたというのだろうか。岐神の田園調から都会へと舞台を移す狙いもあったであろう。15もやや12と同じく、電話をかけられない理由を述べているように見える。もすこし、前句との間を離すべきだろう。16はロッキーに居る恋人に電話しようとしてもままならぬ為、地図で迎って慰めている景か。この句は余情がある。17は樋口一葉の俳句である。この付けは狙いも付味もおもしろく、治定の句に次ぐ傑作である。18は家の内にしぼったのは流石だが、打越との気分の転じが今一步である。19も前句を見立替して、それはそれなりにおもしろいのだが、一卷から恋の情が忽然と消えるのは残念である。20は人間心理のあやに立ち入り、付肌も悪くない。21は例の見立替え、それでも離れて付けている所がよい。22は現代社会の一面か、23は複雑な気分が籠められておもしろい。24は外の景、25は前句を見立替えし、二句併せての恋の情はない。26は治定の句に情景が似ているが、付味と転じで劣る。

次の句は人情自でも他でもよい。雑の長句、題材は何でもよい。酒や四足、時局の句、それに釈教、地名、人名なども出ていない。しかし、それらにとらわれず自由に考えて、おもしろい句を期待しております。

二十韻

梅雨の富士

東 明雅 捌

大富士や梅雨中空に碧を刷き

泰山木の白の冴え冴え

刺繡ぬいの糸を梓よりひき出して

まつはる子等は童べ唄和す

伝承ツを採譜しながら月の村

酸橋ツが欲しくなるやうになり

後れ毛の項に瘦せの目立つ秋

沸き滾るなり庫裡の大釜

三津浜のふたな煮が来て酒をつけ

貉化すか家は近いぞ

春山洞	明雅	正江	和子	徒司	子洞	江子	江子
-----	----	----	----	----	----	----	----

韻松亭連句会のことども

本当に鳴っているンですな。ああ、これがあの有名な上野の鐘ですか。いいものですな。折から巻き進められていた二十韻（私は、ひそかに「雪月花」と呼びならわせば愛好しているが）の「匂いの花」に、明雅先生は「現にも花に上野の鐘響き」の御句を詠いあげられたのである。即物即時ながら、思わず、はたと胸打たれ、息を呑む衝撃と感動を覚えた。連句は遊びと言い、作句はオールフイクションと肯定されて来た。しかし、その反面、「連句も亦写生」と高揚される立場もあり、我等の祖先が独創の文化財である連句の詩精神の確立をめざす立場もある。

江戸期以来、人口に膾炙して、詩歌の世界では月並化してしまった「花」と「上野の鐘」である。今は概念的に観念的にのみ取り扱って顧みようともしない素材である。しかし、それでいいのか。「詩」の世界は、絶えず、より新しいものを索めている。より新しいものを求めるあまり、私たちの祖先が遺した素晴らしいものを忘れがちになっている現代人ではなからうか。そんな私たちに、脚下照顧、「美」の真実に根幹に触れることの大切さを示唆して下さったと思った。本物に、本当のものに、現実、耳にし、手に執って見ることの大切さを今更のように感じたのであった。

昭和六十年六月八日。上野公園内、韻松亭連句会は、東明雅先生と猫蓑連句会の皆様の会であった。私は明雅先生

粉雪の掠める月の径となり

木綿の軍手左右別なく

人ごとのやうに思つてゐたわたし

街で拾つて恋の世渡り

ぢぢばばを騙して持たず金の夢

甲斐の隠し湯万病に佳し

行く末の身のふりかたを案じ居り

子猫また来て膝に居眠る

現にも花に上野の鐘響き

日永の駅に啄木の歌碑

昭和六十年六月八日首尾  
於 上野公園 韻松亭

連衆 鈴木春山洞

秋元正江

式田和子

杉内徒司

洞 司 子 司 子 江 子 司 洞 雅 司

の御言葉に甘えて四国・松山から、のこのこ上京した。御座敷に案内され、暖い御歓迎を戴き、連衆の皆様は御引き合せされた。杉内徒司先生とは厚知である。連句の座は、すぐ、百年の友の如く溶けこむことが出来る不思議な雰囲気醸し出す談笑裡に進行した。楽しかった。

「二十韻の真髓を洞君に覚えて帰つて貰おう」と徒司先生が言われる。春山洞は既に、明雅先生の御招きをいただいた時から、そのつもりだった。単なる遊びでなく勉強させていただく心積りで緊張していた。ホームグラウンド（韻松亭がというのでなく）の明雅先生の御捌きの優雅・適確・真剣さを目のあたり拝見して感激した。大宗匠にして馴れがない新鮮さを漂わせた雰囲気は素晴しく、一生に一度の稀有の体験を得させていただいたと思つている。連衆の方々の猫藪ぶりの付けは、都会的瀟洒さを発揮され、目を眩る思いがして大変勉強になった。『三津浜のふたな煮が来て酒をつけ 和子』には、あっと驚かされたものだ。座の話題を即妙の付けに変化された俳諧は面白かった。

二十韻を体験して、一句一句の付け合いの中に確立する、連句独特の詩精神が、歌仙によって昇華された蕉風俳諧と同様の素晴しさを持つて迫つて来るのを感じた。格に入つて格を知り、格を知つて格を出た連句の世界の「自由」「楽しさ」を体得した。羽化登仙とは、こんな気持を言うのだからか。

（芭流朱連句会主宰 鈴木 春山洞）



石すりへりて坂の曲れる  
頭をあげて瘦身に月ほしいます  
老いてそぞろに寒き詩人

陽籠ル・ル・ル・ル・ルと鳴きつづけ

お茶のおやつは阿称弥陀くじにて  
ワープロに疲れ目薬差し貰ふ

季刊雑誌を出して九号

年を経て双樹に花の真盛り

ふるさとのあの鐘かすむ丘

昭和六十年六月十九日

於 京橋区民館

沙羅双樹

馬場東夷

捌

梅雨寒や花は盛りの沙羅双樹

赤きワインの揺るるギヤマン

金魚売り呼びとめる子の声のして

運動靴をかたかたにはく

夕ざりて仰げる空に小望月

栈橋に来て初潮の海

この道の虫のすだきのいつか絶え

いとしき人の名をそつとよぶ

逢ふ工面算段しつづ厨ごと

先物買の下の値動き

「鍼あんま致します」とて行成流

炬燵の中に猫を入れやり

裸木に釣らるる細き月眺め

大見栄切つて上る鼈

いせ辰の千代紙やさし紙人形

ゆたかに坐る地母神の腰

滝桜今年こそはと満を持し

スマッシュを打つ陽炎の中

メーデーにキン肉マンのプラカード

銀行口座孫もせがれも

女王を女帝追ひ出す目白台

小股すくひの多い夏場所

吊床に本を読んだり眠ったり

こつち向いてよ夢でいいから

ハワイでの甘さたたりて敷かれ気味

ハイブスカスの色は何色

稲妻の斜めによぎる増女

忘れ扇を開きみる月

奥津城に詣れば高く百舌の鳴き

あふるるばかり萱の茂れる

酌み交す生酒の味「鳴戸鯛」

爺と婆とではやす寿歌

故郷の昔を偲ぶなつかしさ

風光らせる森のささやき

花びらも掬ひてをりし蛸蚪の網

胡蝶の影の後に先にと

昭和六十年六月十九日首尾  
於 京橋区民館

沙羅の会

氏原 正雄

「エー、芭蕉さんのお弟子さんになれたの？」と、先生から頂いた伝道書を見た妻は、怪訝な目で私をみやった。それが昨年の三月のことである。

伝道書は芭蕉に始まり、諸先生を経て頂いたひとりひとりの名前で終っている。

A・C・Cの連句教室には、全くの好奇心で入ったのだが、先生のお人柄に魅せられ、連句のとりことなり、はや四年になる。

今年も二期生が頂いた。

伝道書を頂いた謝恩の連句会を上野の鷗外荘で持ったとき、その庭前に見事な沙羅の古木がしつとりと雨に濡れていたのを見て、どんな花をつけるかしらと話し合い、会は「沙羅の会」と名付けられたのである。二期生も同じ処で謝恩の会を持ち、「沙羅の会」への入会の歓迎会は、京橋の区民館で持たれたが、この日もやはり雨だった。

## 連句のなかの季語

—連句雜感(二)—

草間時彦

歌仙三十六句のうちに、季の句と、雑の句との割合がどのくらいかと見て行くと、意外にさまざまである。

標準を考えてみると、夏、冬が二句ずつ二度出る。そのうち、一度は月である。秋は、月が二回で計六句。春はウラの花のところまで三句、名残の裏の花で二句、計五句。合計で十九句ということになる。夏と冬とが一句で捨てる場合もあるから、三十六句の半分が季の句と見るのが妥当であろう。月は三つとも必ず、秋でなければいけないという人もいるが、そうすると、秋が九句登場することになって、秋過剰と言えよう。季の配分のバランスが崩れてしまうのである。

歌仙というものが完成された詩型式であると、しみじみ感じるのは、進むに従って、四季が順次登場して、しかも、

結果としてバランスが保たれているということである。その点、二十韻、半歌仙はまだまだ、季の配分が安定していないようだ。もう暫くの歳月を必要とするであろう。なしろ、歌仙という型式は芭蕉以来、三百年の年月を経てるのである。くらべるのが無理というものだ。

夏と冬は一句か二句。春と秋は三句、場合によっては五句まで続けてよいということになっている。このことについて、わたくしはこう思っている。

春と秋には気候もよく、風物も美しく、生活が楽である。食べものも豊かだ。古い季題を見ると、三月尽、九月尽という言葉はあっても、十月尽とか、四月尽とかいう言葉は存在しない。三月尽は旧の三月、つまり、春の終るのを嘆く言葉である。旧三月が終り、四月になると、伝染病が流

行しはじめ、食べものは傷む。堪え難い暑さが来る。戦前の歳時記でコレラ、赤痢が夏の季語となっていた。コレラを席題として、高浜虚子が

コレラの家を出し人こちへ来りけり 虚子  
という句を作った。疫病は日常事だったのである。

秋もそうだ。実りの秋だ。高温多湿の夏が過ぎた喜びの季節だ。

そう考えてくると、春と秋は一日でも長くつづいて欲しい。夏と冬は一日でも早く終って欲しい。そういう願いが日本人の誰にでもあったのである。それが、春秋は三句だが、五句までよい。夏と冬は一句で捨ててもよいという式目になったのではあるまいか。

だから、花につづく春の句のときは、席上に春の気分がみなぎって、いなければならぬし、秋の月のときは、月光が射し入り、さわやかな秋風が席上に吹いている気分になければいけないのである。季の句は季節感がなければいけない。わたくしはそう思っている。

現代連句は季節感が乏しいように思う。それは何故か。いろいろなことが考えられるが、一つには現代俳句の季語の設定にも一因があるように思う。季語が多くなり過ぎてしまったのである。

季語を分類してみよう。

第一級の季語。古典詩歌にも歌われていて、しかも、現代でも季節感のある季語。例えば、雪、月、花、時雨、時鳥、鶯など。こういうのは季語というより、季題と呼んだ

方が適切である。重い季題である。しかし、歌仙のうちの季の句が、すべて、こういう季題で占められると、歌仙そのものが古臭くなると思う。要所々に使って、歌仙そのものを締める働きをさせるべきだろう。

一級に別格がある。それは、古典詩歌では重い役目をしていてのだが、現代に生きていない季題である。例えば、砧。秋の季題だ。「雀海中に入って蛤となる」などもそうだ。三十六句のうちで一句ぐらいは使ってみたい言葉だが、もとより多用をしてはいけない。

第二級の季語は古典には登場しないが、現代に生きていて、しかも、季語としての約束性も強く、季節感も充分にある季語。例えば、向日葵。盛夏の気分が濃厚だし、感じも新しい。まだまだ、数が多いが季語の中心となっているクラスだ。

第三級の季語は、季語として認められたときは第二級だったのだが、その後、季感を喪失しつつある季語。例えばトマト。一年中、八百屋の店頭にある。歳時記では、どの歳時記でも夏になっている。しかし、夏の季感の乏しいこととは否定出来ない。

トマトを添えし肉のひと皿

こういう付句が出た場合、夏の句か、それとも雑の句か。もつとも、夏は一句で捨ててもよいのだから、どちらでもよいとも言える。

しかし、次の場合はどうなるのであろう。  
トマトジュースで月の出を待つ

「この句はトマトが夏の季語だから、夏の月です」と作者が言ったとしたら、夏としなければならぬのか。そうでなくて、文音で、だまって送って来たなら、わたくしだったら秋の月として受けるであらう。

咲きし牡丹に月の出を待つ

これだったら、夏の月である。牡丹が一級の季語だからである。

第四級は最初から季感が乏しく、最近の歳時記ブームでなんとなく季語になってしまった季語。例えば魔法壇は冬の季語だとする歳時記がある。連句ばかりでなく、俳句としても、どうかと思う季語。ただし、連句では、雑として使う分には一向に差支えない。

第五級は連句に限って、使うことを避けた方がよい季語。そういう季語が、数は少いが幾つかある。夜の秋は大正時

代に夏の季語となった。いい季語だ。しかし、連句の場合、夜の秋と使うと、あとで秋の句を出すのに邪魔になりそうだ。夏蜜柑。これは歳時記によって、夏とされたり、春とされたりしている。夏蜜柑と呼んでも、出荷は三月か四月だから春なのである。避けて通った方がよさそうである。小鳥なども、例えば眼白は春になったり秋になったりしている。

わたくしが言いたいことは、現代連句の作家が、季の句を作る場合、季語の個性、重さなどを充分に見極めてから使って頂きたいということである。歳時記に収めてあるから季語であるというのは安易過ぎる。又、花の座、月の座のあたりは季節感が溢れるようにありたい。歌仙の三十六句のうち半分もの季の句が含まれることの意味を重く見て頂きたいのである。

## 武翁賞作品募集

武翁賞については、昭和五十九年度は残念ながら該当作品がなかったが、昭和六十年度的について左記に従って是非授賞に値する清新な作品があらわれるよう、待望するものである。

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由とし、九月十五日までに呈出されたい。



# 深川遺跡めぐり

——遺跡から伊せ喜へ——

## 中島啓世

去る七月三日、A・C・C・連句教室の有志は芭蕉記念館に集合、旧新大橋址の碑から芭蕉庵址、安宅幕府御船蔵址、素堂邸址（碑無）要津寺（雪中庵三世の芭蕉佛塚）長慶寺（時雨塚）五本松塚（工事中）女木塚、採茶庵址、園女墓、臨川寺等芭蕉関係を巡り、伊せ喜とせうで二十韻を巻き、清澄庭園から隆秀氏の案内で鶴屋南北やその作品の舞台等江戸文学の情緒にひたり雨中とは云えみのり多い一日を過ごすことが出来た。

寛文十二年（二十九歳）伊賀上野から江戸に下った芭蕉が、立机して、地位も安定して来た延宝八年（三十七歳）の冬、市中

を離れ門人杉山杉風の生簀の番小屋を改造した深川の草庵に居を移してから、元禄七年五月（五十一歳）西国の旅に出るまでの十四年間、天和二年の大円寺出火の類焼のため、甲州、高山駿州方への流寓や奥の細道等の旅で留守にしたものの十年余を住んだこの深川。地元深川での友人のことを思うと、飲料水にさえ、事欠いた暮しが、どんなにか慰められたことか。先づお船蔵の近くの安宅に住んでいた、山口素堂。芭蕉はその俗脱清澄の心境に深く傾倒し、蕉門の客分として遇していた。彼は再度の庵の新築にも協力し、母堂の喜寿の祝菊見の宴、忘年会と芭蕉や門人を招き飲を尽くし歌仙も巻いた。次は仏頂禅師で鹿島根本寺の二十一世。彼が鹿島神宮と寺領のことで九年間も訴訟のために度々来ていた臨川庵へと芭蕉は参禅して、仏教の奥義を学ぶと共に仏頂の人格にふれた。貞享四年には彼を訪ねて月見かたがた鹿島詣をしている。そして二年後の奥の細道の途次、黒羽を三里も東の山奥にそれた雲岩寺に和尚の山居跡を訪い参禅の師を偲んで「木啄も庵は破らず夏木立」の句をよみ、人徳をたたえ、思慕をこめたものである。三人目は長慶寺の三

世、松山峯吟師、史邦の芭蕉庵小文庫に「長慶寺の禅師は、亡師（芭蕉）年頃睦び語らはれければ、例の杉風、かの寺に一つの塚を築きて『さらに宗祇のやどりかな』と書きおかれける一帛を壺中に納め此塚のあるじとなせり」とあり、又支考の笈日記にも「師の生前、たのみ申されし寺なり」とある。四人目の友は女木沢桐奚、元禄五年秋には、九月十六日から芭蕉庵に滞在していた酒堂（珍碩）をつれて桐奚宅で次の歌仙を巻いている。（むつちどり）

秋に添うて行かばや末は小松川

芭蕉

雀の集ふ丘の稲むら

桐奚

月くもる鶴の首尾に冬待ちて

酒堂

他にも桐奚との風雅を解する想いの通い合うのを詠んだ次の句が続猿蓑にのっている。

川上とこの川下や月の友

芭蕉

江戸名所図絵の小名木川、五本松の図に、満月を川にうつして舟遊びをしている芭蕉の一行がかかれています。近くの五間堀には神道と和歌にくわしい、曾良も居り薪水の勞を助け、よき友人に恵まれた芭蕉の晩年を偲ぶことが出来る。

夏 暖 簾

膝送り

どぜう鍋

膝送り

半 夏 雨

どぜう鍋伊せ喜の暖簾新しき

窓に待たるる路地の梅雨明け

異国の配る土産も珍らかに

賑かすぎて声も聞こえず

瓦屋根向ふ街屋に登る月

髪結を出てこほろぎの鳴く

リンゴ焼くシナモンの香に惚ぶ人

硫黄島にて玉と砕けぬ

魚に敷く大踏女無口にて

膝に甘える猫をなだめつ

山脈の白く連なる国境

韋駄天走りスニーカーの子

風強き万年橋を渡りけり

手持無沙汰に品書を読む

シャガールの画より抜けて月の中

牧とちる日の終バスの出る

相伝の秘法に醸す猿の酒

横紙破り婆沙羅人生

花分けて千社札貼る大鳥居

わさびの沢に映る山影

昭和六十年七月三日

於 深川「伊せ喜」

明雅

孝子

杉亭

一青子

千町

隆秀

瑞枝

あかり

李花子

淳子

麻子

玲子

弘子

東夷

正江

和世

徒司

貞子

和子

啓世

内々の声なごやかやどぜう鍋

注ぎしビールの盛り上る泡

止みし雨又ひとしきり玻璃うちて

汐の引きゆく新しき橋

やうやくに「湾岸道路」可決さる

月にむかつて金亀子捨つ

秋拾ひいき役者の紋を入れ

ポンと千万祝儀さはやか

ともかくも古稀の齡を迎へけり

霞ヶ関の路の風

偽物の著名ブランド横行し

重信房子テロの女王と

搔傷は猫ぢやなくって妻の爪

色つややかにハツ口の胸

蚊帳の中覗くは赤き月ばかり

芭蕉稲荷は神か仏か

子後の身をベンチに置いて額を見る李花子

山椒の芽の指にかほりて

うすめあけ爺又眠る花の頃

波のまにまに霞む舟杭

昭和六十年七月三日

於 深川「伊せ喜」

東夷

弘子

正江

和世

徒司

貞子

和子

啓世

明雅

孝子

杉亭

一青子

千町

隆秀

瑞枝

あかり

李花子

淳子

麻子

玲子

団樂の揚草蓐や半夏雨

くちなし匂ふ路地の家々

久々による名所跡影もなし

軽き音楽刻む爪先

ほろ酔の男に月の皎々と

夫婦蒲団は今年綿にて

文穀を焼きし烟にちゝる鳴く

パンダが死んで皆がっくり

なぐさめてやさしく金を売って逃げ

閻魔移して修復の堂

呆けうそはCTスキャンあらはれず

町内野球今は監督

九十九夜通ひ一夜の恋ならず

被衣ひきざり雪女泣く

虎落笛聞きつ楽しむ殿様湯

海辺の村に親を残して

秋津洲守らんためと兵の発ち

八丁味噌の蜆汁濃く

猫糞の旗をかざして花の頃

鶏追ひたてる春の裏庭

昭和六十年七月三日

於 深川門前仲町「団樂」

明雅

正江

徒司

孝子

隆秀

和子

江子

雅

孝

司

和

秀

雅

江

司

孝

秀

和

江

孝

第十四回猫蓑会 六歌仙

七月十七日(水) 文京区新江戸川公園・松声閣に  
於て興行 参加者三十二名。

紋白蝶の森に消えゆく

緑 蔭

原田千町

捌

緑蔭の時緩やかに移るかな

千町

のうぜんかつら映ゆる庭先

啓世

遠花火肩車の子はしゃぎあて

東夷

舗道のタイル色たどり行く

和亭

落鮎が自慢のひとつ名代店

杉亭

板前に射す窓ごしの月

和世

雁の棹少年憂ひ知り初めし

和亭

池のほとりにナルシスの恋

和亭

テレビ見る聖・輝・の宴は二億円

和亭

衝動買ひの悔はすぐさま

和亭

生酒は限定品の「吉の友」

和亭

縁に干したる宿のてぬぐひ

世亭

冬の遊行寺坂を急ぎつつ

啓夷

悟れぬままに首くるる僧

同

パソコンの講習会で顔みしり

同

ゴールド・カードちらと覗かせ

啓夷

満開の花に緞帳ゆつくりと

啓夷

春の日傘のたたみ置かれる

啓世

志那の浜遙かに比良の斑雪見ゆ

啓世

漁師の手操る大謀網

啓世

その昔兵児帯いまはブルージン

世亭

まぶしき昼

中川 哲 捌

花曇り鱗の壁の異人館

一

春の坂道軽い足取り

一

ウッパン女つばいドレス雛の宵

一

玩具のマーチとキスオブファア

一

冗談よ三人一緒に寝るなんて

一

小錦並みのお臂撫で撫で

一

まづまづは当りだったと経あげる

一

苗代寒の人もまばらに

一

ゆつくりとローカル電車走りゆく

一

金看板に「七笑」とて

一

幹事長総裁首相官房長

一

グレイハウンドなだめすかして

一

あまねくも月光浴びし神の庭

一

木の実落ちつく天平薨

一

美術展入選を待つ静謐に

一

紙飛行機をばーんと飛ばす

一

曳売りの魚屋組濡らしをり

一

赤飯の湯気すこしたざらせ

一

「桜姫東文章」花の果

一

自動アイロンしばし点滅

江保

哲

世亭

パンクヘアーの針ねずみ形  
蝦蟇叫ぶ「もとの筑波にして返せ」

青桐の幹抱きしめて泣き

身の火照り石もていまだ冷めやらす

マノンを埋めて影のなき砂

朔風に向ひて立てる男あり

一宿一飯一汁一菜

訪れし鎮守の杜に月懸る

唄や踊りに虫の鳴き止む

病棟の看護婦の声暮の秋

馴染になりし人のうつりて

コーヒーにミルク多めに鳩時計

尾道の在鯛の浜焼

切岸の花の吹雪は海に消え

風船売の帰りゆく跡

夏めきし風 富田一青子 捌

夏めきし風吹き入れて句座にあり

水嵩増せし川の紫陽花

片蔭を拾ひて急ぐ家路にて

豆腐屋を呼ぶ幼児の声

盃に映りそめたる望の月

列やや乱し雁のわたれる

啓

嵯峨菊をあえかに染めし秋拾

夷

アルカイックな笑みをこぼして

亭

行く先は知らずともども燃えつくし

夷

跳んではねても釈迦の掌の上

世

あちこちと就職先を探しをり

亭

ギリシャ陶器を売る骨董屋

夷

寒々と白々と月傾ける

亭

煮ゆるを待ちて河豚の雑炊

啓

犬猫に鈴つける役むつかしく

夷

部屋のドアの上の小額

啓

ジョギングの花のトンネルぐりぬけ

夷

雲に届けと飛ばす風船

亭

春愁の止まりしままの鳩時計

町

母のこめかみ頭痛膏薬

世

是清の遺邸石像鼻欠けて

啓

尿して去る野犬一匹

夷

祭すみ覗きからくり店じまひ

亭

悶へおさへて爪弾きをする

啓

あの人の胸にランブを灯さねば

夷

イエスとノーは首の振りよう

亭

雪女郎ちらりと睨みて消え失せぬ

啓

触れもせぬのにゆるむ門

夷

見はるかす湖に月光あまねきて

世

青蜜柑盛る手ひねりの鉢

亭

ひとつ来てまたひとつ来て赤とんぼ

啓

ひとつ来てまたひとつ来て赤とんぼ

啓

ひとつ来てまたひとつ来て赤とんぼ

貞

キリコの描く柱廊の数

遊

円高のニュース恨めし旅終へて

雄

寛いで飲む孫のお点前

貞

空壕に落花を溜めて夢の跡

雄

田楽ひさぐ旧道の店

李

遊

梅雨明け

雄

梅雨明けや池に親子の通し鴨

貞

見えかくれして茂る蒲の穂

李

夏炉焚く山脈近き町に来て

遊

口笛吹けば友もまた和し

貞

暫くは月に濡れ居り句座の前

雄

薄荷の花はうすきむらさき

貞

代々の家業を継ぎて新走り

李

娘三人東京へ行く

雄

唐手にて襲ふ痴漢を撃退し

貞

乱れも見せぬ朝の寝姿

李

レーガンのパジャマの色は知らされず

雄

碧眼秘むる托鉢の笠

李

織月に山犬吠ゆる声寒く

貞

雪の起伏となりし村々

同

麻雀をすればする程ついてゐて

雄

つい止められぬポテトチップス

貞

上野から坂を下り来る花曇

遊

上野から坂を下り来る花曇

啓

上野から坂を下り来る花曇

貞

遊

同

青

李

捌

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

落し物です春の手袋

窓際の社員蛙の目借り時

四月大根もう抜きごろに

特別に許され伊勢の本参り

墨香はしく筆太の文字

父の如日毎夜ごとにかしづきて

猫目の石をいつか手に入れ

にんまりと笑ひてかくす恋の傷

海に立つ虹寄するさざ波

チョコレートたやすく割れぬ厚さなり

古きタイプで打てる脅迫

後の月芝居はねたる人つづき

紅葉狩する峽のむら雨

故郷の鉢いっばいの氷頭鱈

縁に上りて鶏の遊べる

還曆に迎ふる二十一世紀

宇宙旅行は誰にでも出来

太鼓打ち花に酔ひたるチマ・チョコリ

踊る陽炎丘にひろがる

亀の子

花井喜久子

亀の子と戯る声や昼さがり

薫ほのかに青き山椒

輸入せし水着の在庫品薄に

弘

秀

麻

弘

孝

同

麻

孝

弘

麻

秀

麻

秀

孝

麻

弘

秀

淳

弘

捌

喜久子

和子

徒司

民謡会へいそいとゆく

寝られず家並照らす夜半の月

蓑虫何かつぶやいて居り

左右から躰糸とり秋袷

玉三郎が住んでゐる胸

白檀のイヤリング知るみそかごと

レシートが出て有無云はされず

つんのめり気味に下りし雪の坂

ぼうずしゃも屋の鍋に入る月

ちよるちよるとなされますなと神の声

呆けは呆けでも作り呆けなり

高速路バイクをとばすヘルメット

他人名義のカード使ひて

花の井を名乗りて歌仙初捌

喜び久し蝶と鳥とに

春挽の糸でとうとうとうたり

赤軍兵士帰国切望

レーガンが病みてがったりドル下がる

長胴さらし道よぎる蛇

三菱の原で綾取り筒井筒

叶はぬ恋に簪のゆれ

そこを又も一つ押してみたけれど

ふいと横向く香道の型

赤飯弁当簞えし蒲鉾

テ

久美子

久

和

雅

明

司

和

司

和

雅

久

ル

司

雅

和

久

和

ル

久

和

司

和

同

月の字を勘亭流で書きながし

隅田川にて秋風を聞く

蝮がなき蚯蚓が鳴いて老が泣く

サラサラサラと砂のこぼれる

独り酌む限定醸造「吉の友」

窘められし餓鬼よりの癖

咲ききつて空に溶けゆく花の色

春小袖着て薄墨の精

夏蝶

速水昌子

夏蝶や眩しき光こぼしつ

藻の花ゆるる橋桁のかげ

土用干し又も古着を取り出して

香辛料をきかす夕食

久々に単身赴任の帰る月

銀杏ころげて止まるワイパー

初狐の一発峽にとどろきて

地蔵にあげし塩がとけ出す

夜もすがら待たせて辛き箱枕

次の男は誰にしようか

円形の魚槽を回る饜の顔

火の番をして蒼き月見る

知らぬ間に田園調布の家売られ

夏目雅子の病みてひさしき

ル

久

雅

久

司

和

喜

ル

捌

昌子

瑞枝

篤子

てるよ

彬風

枝

風

よ

風

篤

枝

よ

篤

よ

親衛隊氣勢を上げていつ気呑み

となりの町へポチをさがしに

先生と呼ばれて歌ふ花の歌

春の灯に天金の本

念願の伊勢詣りして亀の鳴く

遠祖は甲賀忍びなりしと

放射するレーザー光線像結び

眼をしばたたく酸性の雨

肩よせて向ひの旦那わが亭主

何を隠さう妻はレズのけ

おもかげの松島こうれんさくと食ぶ

雲の峰立つ空に飛行機

便追のきのふの枝に尾を振れり

働きの者のブータンの人

入浴もそこそこにして月の宿

机につまむ秋の蚊の骸

針刺に針足し母の冬用意

昭和昭和と親子三代

四DK九階住まひやや慣れて

賞罰なしと結ぶ履歴書

山姥のめぐりて花の盛りなり

霞たなびく湖は平に

明

風 篤 雅 枝 よ 篤 風 よ 篤 枝 同 篤 枝 同 篤 枝 昌 篤

### 質 疑 応 答

問 挙句は前句にうまく付いていなくて

もよいと言われますが、それは何故でしょ

う。また、挙句についての故実があったら

お教え下さい。(世田谷 美幸)

答 お尋ねの件の真意は、歌仙一巻の最

後になつてうまく付けようと考えこんでい

ては、一座の興が覚めるから、巧拙を考えな

いで早く付けた方がよいというわけです。

また、挙句の前は句の花で、どんな花の句

が出るかは大体推測がつかますから、挙句

は前もって考えておくものとも言われる

わけです。

挙句は、一巻の成就をよるこび、あつさ

りと後に続かぬよう詠むべきもので、哀傷

めいた句はよくないし、また、発句にある

文字を避け、字余りも嫌います。

挙句の前は花の定座ですが、この花で春

季が五句続いても挙句で季を変えてはなら

ぬ、たとえ、春季が六句続くことになつて

も、春の挙句を作るべきだと言われています

すが、こんな例は減多にありません。

また、挙句は、発句の作者や亭主(脇の

作者)が作るものではありません。正式の俳諧で、最初の一巡に執筆の句が入っていない時は、挙句は執筆に作らせるべきものとされています。

問 脇は韻字留めと教わりましたが、韻

字留めとはどういうことでしょうか。

(多摩 山田豊子)

答 韻字留めとは、一句の終わりを体言

(名詞・代名詞など)で留めること、脇句は

特に韻字留めにした方がよいと言われる。

確かに、体言で留めると一句のすわりがよ

いが、これは発句次第であり、必ずしも拘

泥する必要はない。芭蕉出座の作品を調べ

てみても、韻字留めになっているのは約八

割で、あとの二割は用言や助詞・助動詞な

どで自由に留めている。これらを一括して、

手爾波留め、または、かな留めという。も

ともと韻字とは、聯句で、二句目ごとに脚

韻をふむのにならつて、脇の句末を漢字に

することであるが、漢語を主としない連歌

・連句では韻をふむ必要はなく、本来は無

意味である。

# 連句会案内

。連句教室 会費千円

日時 第一日曜日 午後一時—五時

会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ十一ノ三

(電) 九四一—一四四五

。A・C・Cゼミナール

日時 第二・四水曜 午後二時—三時

会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

新宿区西新宿二ノ六ノ一

(電) 三四四—一九四一(代表)

入会金 五千円

受講料 二万二千円(六ヶ月)

。猫養会(会員制) 年四回

(二月 四月 七月 十月 第三水曜日)

会場 松声閣

文京区新江戸川公園内

(電) 九四一—九六四九

。柏連句会

日時 第三日曜日 午後一時—五時

会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地マ

ーケット下車)

# 雁帛往来

▼連句かつらぎ450号記念大会を6月29日大津市義仲寺無名庵で開催。席上主宰岡本春人氏より、かつらぎ連句の理念及実作上の信条を内外に表明された。

又、新しい十八句立の形式の連句「居待

・出花」の制定発表も行われた。

子午線下でんでん虫と出会ひけり 青畝

を発句として参会者全員によつて

たたなづく青垣山や花霞

と四十五吟の連句一巻が完成した。

連句かつらぎ発行所

▽主宰は電通連句部も指導されておられる。「社報電通人」57号に掲載の歌仙。

歌仙「梅日和」の巻

南受け広き芝生や梅日和

土匂ひくる朝の体操

春障子茶を飲む影のやはらかに

隣の語今日はお休み

取り残すシートに隠る居待月

秋刀魚の臭ひしみつきし路地

焼松茸強ひる親父に泣く子供

理想は高く想ひとどかず  
カバンつめかの人の名を繰り返し 英子  
出雲の神にはづむ賽銭 恵子

純白の高き灯台日の岬 助

紙のコップに熱きコーヒー

パーマンもゴジラもつどひ夜店たつ

月光仮面も浴衣下駄ばき

長年の虫歯うづきて走り出し

二段跳びにて保つ健康

空に花地下に「やまびこ」上野駅

春闘次第飲屋繁盛

▽本号から四頁ふやすことになりました。 助

季刊「連句」第十号定価五百円

誌代 年二千円(送共)

発行 昭和六十年九月一日

編集・発行人 東 明雅

季刊「連句」発行所

〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二二

電話 〇四七一(七五)一一九二

振替口座 東京 七—五二—一三三

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都豊島区高田一ノ六ノ二四

電話 〇三(九八六)一七一一五

